

万葉思^{しの}ひ草 七

—中皇命、紀伊国幻想 一—

升 田 淑 子

『万葉集』卷一に、次のような歌がある。

中皇命の、紀の温泉に往しし時の御歌

君が代もわが代も知るや磐代の岡の草根をいざ結びてな (一〇)

わが背子は仮廬作らす草無くは小松が下の草を刈らさね (一一)

わが欲りし野島は見せつ底深き阿胡根の浦の珠そ拾はぬ或る歌に云はく、わが欲りし子島は見しを (一二)

右は、山上憶良大夫の類聚歌林を検ふるに曰はく「天皇の御製歌云々」といへり。

中皇命は、卷一に五首(長歌一首、短歌四首)を残す初期万葉の歌人である。特に長歌「天皇の、宇智の野に遊獵しましし時に、中皇命の間人連老をして献らしめたまへる歌」(三、反歌四)は、神を感じている緊迫した呪詞の中に慈愛のまなざしを感じさせるような不思議な静けさが漂う、気品高い秀歌である。歌の真中と最後に「御執らしの 梓の弓の 中弭の 音すなり」という詞を繰り返す均斉のとれた古代歌謡の様式を踏襲する形には、誦詠するに破綻のない美しい響きがある。額田王と共に初期万葉で双壁を成す長歌歌人であったことを思わせる(因みに、四番の反歌は、間人連老の作と考えている⁽¹⁾)。右の三首の題詞には「一行幸時」という文字が見当らない。「往しし時の御歌」として主体を中皇命とする紀伊国の歌となっているが、それは儀礼性の問題を問うことにもなるのであろうか、中皇命の特色が感じ取れるような言語表現に出会う。その表現は中皇命の個性であると同時に、初期万葉の特性でもあったと考えられる。

中継ぎの天皇の意味を持つ「中皇命」など類似する呼称は他にもあるが、「中皇命」という呼称そのものは『万葉集』にしか

見えない。「中皇命」の義は、折口信夫が「其君（筆者注・天皇）との血の極めて近く、宮廷の神のみこともちたるに最適当な古代風のなからひに在った女君を、中皇命とよびわけた様であつた。」⁽²⁾として、中継ぎの天皇という意味ではなく、天皇と神との間に立つ女君であると指摘した通りである。これを受けて神田秀夫氏は、男帝の「外」なる天皇⁽³⁾に対して「内」なる天皇⁽⁴⁾の意とし、その系譜について説いている。それはヒメ・ヒコ制に準ずるものであったと考えられるわけだが、神田氏の、「宮中では自分が天皇だと思つてゐたであらう。」の言が、中皇命の、中継ぎの天皇とは異なる意識や精神性を具体的に語っているように、あるいはそうであつたかもしれないと思う。

『万葉集』にしか見られない「中皇命」が誰を指すのかという問題では、齊明天皇（直木孝次郎、沢瀉久孝）、間人皇女（舒明天皇・齊明天皇を両親とし、天智天皇を兄に、天武天皇を弟に持ち、孝徳天皇の皇后となった。賀茂真淵、鹿持雅澄、折口信夫、中西進等。現在最も有力な説）、倭太后（天智天皇の皇后。吉田貞吉）等の候補があがっているが、筆者は間人皇女説をとっていることをすでに述べた。⁽⁴⁾

中皇命間人皇女の生涯を通観すると、「中皇命」であつたが故の宿命であろうか、謎が多く、時には眩惑的でさえある。白雉四年（六五三）、遷都を否ぶ孝徳天皇を難波に置き去りにして、中大兄皇子が都を飛鳥河辺行宮に一方的に引き揚げた時、間人皇后は中大兄皇子に従つた。ヒメ・ヒコの関係を楯にこの行動が正当化されようとしたことが十分に想像されるが、このことについては、中大兄皇子の間人皇女への思慕の念を説くものもある。そのことがあながち否定できない要因としてあつたとしても、それだけとは考え難い。孝徳天皇はこうした混乱の中で、自分のもとを去つた間人皇后に「鉗着け 吾が飼ふ駒は 引出せず 吾が飼ふ駒を 人見つらむか」と、恨悔の情やる方ない歌謡を送つたと『日本書紀』（白雉四年、是歲）にある。孝徳天皇は翌年崩御。その四年後に、有間皇子の謀反・刑死事件は起つた。子を持たなかつた間人皇女は何を思っていただろうか。悲しみの多くを身に纏っているはずであるが、間人皇女にしても、そして額田王にしても、その心情を歌に白して癒とすることは無論なかつた。中大兄皇子は、称制四年二月二十五日の間人皇女薨去の後、近江の大津宮で即位している。皇女の没後三年経っていた。この不可解な行動が、天智天皇の即位を宮中最高位の巫女間人皇女の死と関係づけて語られるゆえんである。「中皇命」としての間人皇女が、その生涯を年代的に額田王と深くかわつて送っていたことも、⁽⁵⁾齊明天皇の代作問題が二人に付帯することと相俟って見逃しにできない。初期万葉へのつきない興味がここにもある。

はじめにあげた中皇命の紀伊国三首の歌は、中皇命を知る上での数少ない資料である。中皇命の本質を考える上にもあらため

て一首一首を詳細に読んでみたい。まず作歌年代であるが、題詞や左注からは不明とするのが厳密な言い方であろう。ただ、作者を類聚歌林によって斉明天皇作とする左注があるところから、斉明天皇の行幸時であったことが示唆されている。斉明天皇の紀伊国行幸は、『日本書紀』によると四年十月十五日から五年正月三日の帰京までとなる。皇極時代には、蘇我蝦夷・入鹿父子の専横と滅亡の事件などで天皇が都を離れることは不可能だったであろう、行幸の記述はない。したがって各地への行幸は斉明時代に入ってからとなる。先の四年から五年にかけての紀伊国行幸の後、五年三月一日に吉野、三日に近江の平浦、そして六年十二月二十四日に難波への行幸があり白村江の戦いに向けての準備が始まる。七年一月六日には、『万葉集』八首歌の左注に記しているように、「御船西に征きて、始めて海路に就く。(略)庚戌に、御船、伊予の熟田津の石湯行宮に泊つ。」と続く。これら『日本書紀』による行幸の記録は、四、五年そして六、七年と年毎に及んでおり、高齢の天皇にはかなり厳しい移動であったと思われるが、中皇命の紀伊国の歌をこの内の四年の時のことと考えて大過あるまい。

中皇命の紀伊国三首の歌には、二首までも相聞歌のように「君」(一〇)、「背子」(一一)と特定の人物を想起させる人称が詠み込まれている。「君」と「背子」とを同一人物とするもの、あるいは別人と見る説があるが、一首目からの流れのままに一二番歌にいたると、この歌の「わが欲りし野島は見せつ」の主体を「君」「背子」にあてる解釈となる。そして幾分恣意的傾向のうかがえるような訳がなされることがある。たとえば、「かねて私が見たく思った野島を兄君は見せてくれました。があの深淵の阿胡根の浦の珠はまだ手にしませんわ。」(金子元臣『萬葉集評釋』)といった風である。兄中大兄皇子への私信に近い歌として見ればそれはそれで面白いし、また、多くが右のように解しており、前二首からの連作として見れば、三首目には「君」「背子」が省略されているという見方が自然に成り立つであろう。しかし、筆者が最も理解し難く、一二番歌の周囲を彷徨して多くの訳に溶け込めなかったのは、一二番歌の「見せつ」に万葉風ではない語調を見ていたからである。「見せつ」そのものは文法的にも「見せた・見せてくれた」と訳して意味も通るのであるが、最終句「珠を拾はぬ」との呼応関係に及ぶと、中皇命に対してある種俗界的な異和感が生まれて、揺々として落着かなくなってしまうのである。それは「兄君が見せて下さった」でも珠は拾わない」という何か舌足らずのものの言い、そして読むべき内容を見出せなくなってしまうのである。中皇命は、以前から見たいと願っていた野島に今度は行かれるので楽しみにして来た。その野島を、「君」(あるいは「背子」)がついに見せて下さった。でも、底深い阿胡根の浦の珠はまだ拾わない…ので、拾ってほしい、という甘えであるのか、自分で拾いたいという駄々に似た願望なのか、いや「拾はぬ」には本来願望の意味はないので、「拾いません」というのはやはり甘えの構造であろうかと、迷う

のである。それならば左注に言う「或る歌」のように、「わが欲りし子島は見しを」という異伝の方が余程すっきりしている。こちらの方ならば、「子島は見たのに―珠はまだ拾わない」と、素朴な意として伝わってくるのである。しかし、歌は最初から今見る形であったと考えたい。その上で中皇命に歌を詠ませた契機として何があったのであろうかと尋ね、何れかに隠された言葉があるのかもしれないと疑う。そこに鎮潜する初期万葉があるのかもしれない。本稿の目的の一番としたのは、この一二番歌における中皇命の真意を探りたいということなのであった。しかし、先に触れたように、そこに到る前にまず一首目の歌から読み直してみることにする。

君が代もわが代も知るや磐代の岡の草根をいざ結びてな

この歌には最初、誰でもが、悲劇的な生涯を悲惨な刑死というかたちで十八歳で閉じた有間皇子の、「磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む」(巻二―一四二)を想起し、関連づけて見るのであろう。旅の無事を祈る「結び松」の歌は雑歌ではなく挽歌の部立に属しており、長忌寸意吉麿や山上憶良あるいは柿本人麿歌集など、後人の追和歌が多く詠まれている。こうした万葉人たちの心象が我々の脳裏にも定着し、心理的に、磐代、有間皇子、(真実を知っている)松を、「悲劇」という観念の中帰納させているのかもしれない。有間皇子事件はまさに斉明四年の紀伊国行幸の真只中に起きた。有間皇子の死は一行が出發してから約一ヶ月後のことであった。中皇命の歌の穏やかさや明るさから考えて、紀伊国三首は事件の前に詠まれたと考えた方がよいであろう。ただ、磐代と植物の枝や根を結ぶ呪術とが、二人の歌に共通する主題となっているのに間違いはなく、背景には「生命」に対する深遠な思想のあったことは疑いない。

「君が代」の「代」には原文に「齒」があててある。「齒」字はよわいと読んで年齢、寿命の意を表わす。万葉仮名では普通「ハ」と訓み、「ヨ」と読むのは集中ではこの歌にしか見当たらない。「ヨ」は多く「世」「代」と表記し、「己が世に」はまだ渡らぬ朝川渡る」(巻二―一六 但馬皇女)、「生ける世に吾はいまだ見ず」(巻四―七四六)や、「うつせみの世の事にあれば」(巻三―四八二)、「うつせみの世は常なしと」(巻三―四六五)、「遠き代に神さびゆかむ」(巻三―三三二)、「永き世の語りにしつ」(巻九―一八〇二)など、これまで生きて来た時間や、現実のこの世、あるいは歴史的時間などを言っている。沢瀉久孝氏は中皇命を斉明天皇とするところから、「君」を天皇である自身の後継者である皇太子中大兄皇子とし、その「治め給ふべき御世」(注釋)と解した。しかし、それは政治性の強い解釈であって、「結び松」の呪意から逸れてしまうように思われる。吉永登氏は中皇命を

間人皇女としながら、有間皇子が皇太子の諷問にあって大和に帰る途中、磐代まで皇子を送って行ってそこでそれぞれの歌を作ったのではないかと考えている。⁽⁶⁾ それであれば寿命という意になるので賛同できるが、先に述べたように、中皇命の歌は有間皇子事件の前に詠まれたものと見ているので、吉永登氏の作歌事情の説明には従えない。しかし、集中一例のみ、「ヨ」に「齒」の字を用いて表記した背景には、寿命や生命の意味であるとの教示があったと考えたい。

「知るや」については、吉永登氏（先掲論文）に、原文「所知哉」を旧訓通りに「知れや」と訓んで反語と解する論がある。これに対しては、吉永氏が「少なからぬ抵抗を感じられないでもない。」と少し弁解しつつも、それを上代の人の素直な表現であったと説明しているがどうか。ここはやはり諸注がそう訓んでいるように、「知るや」と訓む方がよい（訓釈については沢瀉注釋に詳しい）。反語ではなく、知っている（支配している）と断定することによって、結句の「いざ結びてな」への語勢がつながり、明確に作者の意志が伝わってくる。中西進氏は先の有間皇子の歌を、その心は結んだ松の解けないことに集中しており、「無事であつたら」では不十分で、「真幸くある事が今日の唯一の願い」「運命の占い」であつたと述べる。⁽⁷⁾ 有間皇子が「真幸くあらばまた還り見む」と表現した形は、詳細は後に譲るが、古来、我国の歌謡の中で継承されて来た「ば」の接続の形の一つ「―ば―む」で、たとえば国見歌の形である「―見れば―見ゆ」と同様の機能を持つ表現であろう。国見歌の「見れば」には「見たならば」という仮定の意味はなく、すでに「見る」という呪的な行為が起こされていることをこうした言語表現によって前提とし、それによって「見ゆ」を確信して行く。したがって、「見れば」は呪詞の形として解される。有間皇子の「真幸くあらば」に比して、中皇命の「―知るや―いざ結びてな」は解釈上に不透明感を残さず、直線的・積極的で、詞が明快である。これは、額田王の八首歌「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」の最終句に全く等しいと言ってもよい。額田王の歌には、白村江の戦いという特殊な背景があった。中皇命の歌にも、額田王とは緊迫した状況とその規模こそ違え、語勢には同じ堅固な意志の響きがある。これが初期万葉の女歌の詞の力なのである。そして、中皇命の草の根を結ぶ信仰は、「磐代」であることと不可分に関係していたことも見逃してはなるまい。「結び松」は有間皇子事件に直結する故事なのではなく、「磐代」という、「生命」を掌る斎つ岩群が厳然としてあったことに回帰して行く聖所信仰なのである。「いざ結びてな」は、草根の結びの呪術を待ち設ける磐代に今立ったという感動であり、その感動が歌の契機であつたと考える。それは中皇命の心の中に「生命」が主題として在ったということに他ならない。

「君が代もわが代も知るや」は、「君の生命も私の生命も（すっかり）知っている（支配している）」と訳せる。この詞では「君」

が誰を指すのかに諸注の注意が向けられて来た。先にも触れたが、作者を斉明天皇とした場合の中大兄皇子、作者が間人皇女になると斉明天皇が加わってくるわけであるが、筆者は間人皇女と考えているので、「君」は斉明天皇か中大兄皇子ということになる。「君」は、『万葉集』では男性への尊称として使用するのが通例であるところから、中大兄皇子が有力視されている。伊藤博氏は、中皇命が斉明天皇にならわって皇太子に呼びかけることは、互いの平安を祈ることと共に行幸全集團の安穩をことごとくことになる（『萬葉集釋注』）。儀礼的な呪歌はたしかにその性質を備え持つが、しかし、何故「君が代」だけではなく「わが代」をこつとも明瞭に並列させるに到ったのか。しかもこの二語は全く対等の力関係にあって、中皇命は二つの生命を互いに引き合おうとする関係に置いた。歌が生命を掌る聖所「磐代」である必然性を考えると、「生命」はもっと主題化されてくるのではないかと思う。その主題に最も近い人物、それは、今最も「生命」に敏感な人、「生命」に傷つき破れていた斉明天皇ではなかったかと思う（土屋文明『万葉集私注』に同じ）。「君」は天皇を指し、「君が代」と「わが代」とを対等に置いて「生命」の交感の出来る立場にあったのは、斉明天皇と、斉明天皇の心を代弁する呪的継承者である中皇命であった。

斉明天皇四年の紀伊国行幸は、斉明天皇にとって大変重い旅であった。蘇我氏一掃の後、世の中がようやく落ち着いたと思ったのも束の間、斉明四年五月に皇孫建王が八歳で薨去した。この建王の死は斉明天皇をして狂人のように悲摧させたが、その憔悴ぶりは『日本書紀』に伝えられている。この紀伊国行幸時にも、次のような歌謡を詠って建王を偲び、さながら送葬のような場面であったことを想像させる。

山越えて 海渡るとも おもしろき 今城の中は 忘らゆましじ

水門の 潮の下り 海下り 後も暗に 置きてか行かむ

愛しき 吾が若き子を 置きてか行かむ

斉明天皇は歌謡を口ずさみ、秦大蔵造万里に、この歌を伝えて建王のことを決して忘れることがないようにと命じた。右の歌謡が物語るように、斉明天皇の心は山越え野越え、潮あらい海辺に来たって、また暗黒の別離の辛苦に入って行くのであり、紀伊国は今そのように、天皇には映っている。『万葉集』で、土地や国名を一つの題詞で括った歌群が、挽歌の部立に収められているのは紀伊国だけである（『紀伊国作歌四首』巻九―一七九六―一七九九、柿本人麿歌集）。『日本書紀』には、伊奘冉尊を紀伊国の熊野の有馬村に葬ったとある。紀伊国には何か、生と死にまつわる生命の秘密が在るのかもしれない。因みに、泊瀬が四首、巻

七・十三それぞれに分散してある。横にそれたが、斉明天皇は、加えて健康上に問題をかかえていた。三年九月には有間皇子が陽狂を牟婁温湯で療治したという（虚言であったが）話を聞いて、「天皇、聞しめし悦びたまひて、往しまして観さむと思欲す。」（日本書紀）と、今回の紀伊国行幸の引き金となった記述がある。斉明天皇は、『文選』から引いた文ではあるが「時に興事を好む。」（二年、是歳）と言われたように、大土木工事を頻繁に行って人々の誇りを受けたこともある。天皇の葬儀の様子を山の上から大笠を着た鬼が臨み見ていたという。不安定な要素を多くかかえて生きて来た斉明天皇を最後に見舞ったのが、皇孫建王の死であった。紀伊国の磐代に来て、斉明天皇が「生命」を再び掴もうとし争い疲れて祈る姿に、日一日と生命力が削り取られて行くのを見たのは中皇命であったと思う。「君が代もわが代も知るや」と歌いかけた言葉に潜む中皇命の呪意は、自分の生命の贖いをもって斉明天皇を救おうとするもので、「いざ結びてな」は母天皇に誘いかけるがゆえの強さであった。

時代は下るが、巻十七に、「酒を造れる歌一首」と題した大伴家持「中臣の太祝詞言ひひ蔽へ贖ふ命も誰がために汝」（四〇三）一）、巻六に、吉野行幸時の笠金村の長歌の反歌「皆人の命もわれもみ吉野の滝の常磐の常ならぬかも」（九三二）がある。それぞれの歌には、「汝」「皆人」と対置した「われ」があり、「われ」の生命をもって「汝」「皆人」の長寿を護るという、古代人の共感呪術的な包容力の豊かさを見る。それは、「ちはやふる神の御坂に幣奉り斎ふ命は母父がため」（巻二十一四四〇二 防人、「時つ風吹飯の浜に出で居つつ贖ふ命は妹が為こそ」（巻十二一三二〇一）、「玉久世の清き川原に身蔽して斎ふ命は妹が為こそ」（巻十一一二四〇三）など、庶民の歌の中からもうかがえ、「生命」で「生命」を贖うという究極の表現の頂点に、中皇命は居たことになる。

紀伊国へは、国境の真土山を越えて紀ノ川を下り陸路はのちの熊野街道筋によったと、犬養孝氏の『万葉の旅』にある。紀ノ川沿いには歌枕になった妹の山背の山があつて、家を離れて旅する人々に妻を偲ばせる。牟婁の紀の湯は神秘な力で貴人を招き寄せた。外洋につらなる紺青の海は天に接し、南の陽光は明るく暖かい。たたなずく青垣山隠れると称えた大和とは異界の、憧憬の地であった。山部赤人は、神亀元年聖武天皇の行幸従賀歌で、「風吹けば 白波騒ぎ 潮干れば 玉藻刈りつつ 神代より 然そ尊き 玉津島山」（巻六一九一七）と、紀伊国の奇景に神威を感じると讃美している。これの第二反歌「若の浦に潮満ち来れば 鴻を無み葦辺をさして 鶴鳴き渡る」（九一九）は、静かにみつめる叙景の目で、紀伊国の風土と文学との関係を豊かに匂わせるまでになっている。しかし、中皇命の時代には、赤人の歌に見られるような叙景表現はまだ育っていなかった。ようやく自然と人事が緩やかに分離をはじめた初期万葉の中で見た中皇命の自然は、後退を抗う古代の宗教性と新生する美的感覚とが乖離と融

合を繰り返す、生物的な姿であった。

中皇命は紀伊国の歌の中に、磐代・野島・阿胡根の地名を詠み込んでいる。感情語を雜えて歌っているところを見ると、音に聞く他国の地を訪れてそこに立ったという感慨を確かに知覚し、景への客観性を窺わせてはいるのだが、中皇命の言語はそれを超えて、内奥の動きを伝える生身の中皇命を描き出す。

紀伊国の歌の第二首目には地名が詠み込まれていない。仮廬を造る時の材料となる草について、その採取場所を特定して示した歌であるが、中皇命は「草無くは」と言う。なにげなく挿入されているように見える語であるがきわめて創造性に富む。一言で言うならば万葉風ではない。「ば」で接続する類似の表現は多数あるが、しかし以て非なるもので、それは、歌の言語として、ある時は大きな差となることがある。この語は、中皇命独特の言語感覚による表現であったといってよいと思う。次にこの歌を読むことにする。

〈注〉

- (1) 拙著「中皇命」と宇智野遊獵歌（『万葉歌人論 その問題点をさぐる』昭62・3 明治書院）
- (2) 折口信夫「万葉集研究 女君 中皇命」（『折口信夫全集 第一巻』昭40・11 中央公論社）
- (3) 神田秀夫「万葉の比較文化的省察 I」（『万葉集研究 第一集』昭47・4 塙書房）
- (4) (1) に同じ
- (5) 額田王の生年は、『懷風藻』に記載のある孫の葛野王伝の文末の年齢から逆算する。その年齢を葛野王の没年とするか、式部卿拝命時とするかで若干の誤差は生じるが、額田王の生年はだいたい舒明天皇二年頃、六三〇年前後と推定される。中皇命は、天智称制四年、六六五年没。天智天皇は一〇年、六七一年に四十六歳で没。これを資して逆算すると、間人皇女の生年もだいたい六三〇年頃と推定される。但し詳細は不明である。
- (6) 吉永登「中皇命の歌一首について」（『万葉 その異伝発生をめぐる』昭30・1 萬葉学会）
- (7) 中西進「三七世紀の万葉 第四章 真幸くあらば」（『中西進万葉論集 第四卷』一九九六・六 講談社）